

京都部落問題 研究資料センター通信

第23号

発行日 2011年4月25日 (年4回発行) 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

三浦参玄洞の水平社記事について

「中外日報」を中心に (三)

秋定嘉和

(京都部落問題研究資料センター所長)

三浦の社会運動批判

一九二九年二月、『中外日報』

紙で三浦は、新労農党樹立運動に関心をもち河上肇と大山郁夫の動向に注目している。河上の諸論文は「涙を流して読んだ」。しかし

大山の演説はおちつきのない社会民主主義排撃で、「自己陶醉」からさめないものとみた。また極左

(共産党)のビラや悪罵に「気が索かされて居る」態度に失望、態度に崩れがあったという。大山以外の論者も失態をみせた。どれもみな「セクトに落ちて」しまった。

牧師と同様、運営に没頭している。「社会運動と宗教、それは本紙に於ては既にカヒの生えた題目になつて」しまったと述べ、次の年から

の新しい展開をのぞんでいた。宗教の可能性

三浦には西本願寺の動向は関心のある存在であった。西本願寺の

保摂会長大谷光明の「執行所の事

務始め」の声明「万言の布教も一杓の米に価せず」は折からの恐慌の生活苦のなか世上の関心を集めた。

本願寺の経済的維持困難のなか実践的には空望である。無産階級

戦線の闘争と犠牲について西本願寺は「彼等と協力して解放運動に

寄与」することは困難であろう。しかし犠牲者救援の為に一臂の力を添へることは漫然とした「一杓

の米」の救援より「効的」であるとした。

そして三浦はかつて本願寺に「解放運動犠牲者追甲の議」を提出したが再度、この案を提案する

これは「布教」や「一杓の米」にまさる西本願寺の「最適切」な仕事であり、その意図する「物質的

濟度を達成する上に於て「無二の良策と信ずるとのべた。

運動の犠牲者・遺族救援こそ仏門の使命である。不当圧迫に対す

る抗議こそ「保摂の親示」を生かすことであると三浦は強調した。

(一九三〇年一月)

三浦にとって宗教とは、過去から現代まで思想の変革にあつても巧みに大衆を捉えてきた存在であつた。その巧みな比喻によると、「ランプが瓦斯燈になり、更に電燈に変化しても夜路を照らす光そのものは滅せぬ」とする。したがって

「宗教そのものはマルキシズムともその他の思想とも巧みに結びついて自ら存在をつゞける」ものであつた。「目覚めた宗教者は彼岸の享

樂などを宗教の本質とは考へておかない」とし、このような宗教者の考えが「全部の宗教者の心を捉へたとき、始めてマルキシズムと宗教との結合が可能」とみていた。

しかし、今は双方とも憎悪に近い関係で否定するだろう。だが、マルクス主義者と宗教者の熱情と犠牲的精神はともに共通するものである。「かくて宗教の階級的転化は彼自身更生への必然的過程であらねばならぬ」と結んでいる。(一九三〇年四月)

恐慌下の宗教とマルクス主義

一九三〇年代に入つて、恐慌と

宗教弾圧の時代に入って三浦は、佐野学の支配階級の宗教利用について認め、この方向を「得得然として居るやうな宗教者」を「恥知らずの骨頂」と宗教界を批判した。(一九三〇年八月)

また、大阪の「外島癩療養所拡張問題」についても、行政方針を「大阪の宗教家」が無関心をよそおっているに対して、「一片のメッセージ位は出しても人は笑ふまいと思つ」と批判した。(一九三〇年一〇月) マルクス主義者は階級闘争で地上の樂園を願っているが、民衆の現世的苦痛や不平をやわらげ「彼岸世界の幻想に溺惑せしめやうとしてみない宗教者」は幾人あるかと借問し、そんな現実はない、こんな宗教者と「マルキシズム」と「口説の論」を並べているのはともに「愚の極」であるといふのが三浦の指摘であった。(一九三〇年一月) 一方、宗教者の階級的闘争はいけないという議論について、争議に直面しても資本家や政治家すら新しい労働組合法や団体交渉権、罷業権等を認めようとしている。宗教者のみ階級闘争は悪事としている。闘争の早い解

決への配慮が必要ではないかと宗教の現実世界への踏み込みを主張したのである。(一九三二年一月)

このような三浦の視座は教団の内部構造におよんだ。三浦によると「主要なる構成分子が有産僧侶」であり、それによって「宗団」はブルジョア的存在になっている。また、その「施政乃至慣習」となっているこの人々を「一切の宗教機関から排除せねばならぬ」。現在は、宗団は「有産無産の二つの階級に引裂かれ」ている。この体制を守っているのが「愛山護法とか敵護法城」という「旧来の伝統的イデオロギーである」。これが「成就衆生の理想と一致するものでないとの自覚が喚起」されると指摘、やがて「階級の分裂をハッキリ意識するに至るであらうことが予見される」と述べた。そして「無産僧侶が全宗団の支配力を完全に把握し得たとき」宗団としての社会的進出がなされるとした。(一九三二年一月)

三浦の現代史関心は僧侶のあり方にひきつけて広い。台湾の「霧社蕃事件」、「鎮海の学童焼死事件」など多くの「追甲法要の類」があった。しかし宗教界は、事件の原因調査はしない、批判もない。しかしプロレタリアは外国の炭鉱爆裂にも原因究明、批判の眼をもつ。人類愛、同胞愛を看板に飯を食っている僧侶が「他日の戒」とする親切をもちたぬ。ただ「追甲会をつとめさへすりやそれで自が役前は済んだ」という顔をしている。僧侶は批判的能力もない法衣をまとって立騒ぐだけの存在とみられている。認識をもっているなら社会問題に働きかけてはどうかと提示する。しかし、一方、従軍僧の場合、味方を勇気づけたり、戦死者のお甲いをしていく。ロシアもアメリカも同じく「正義」の戦争という。正邪の「規準」を僧侶は新しく求めない。労資闘争も超然主義か、資本家地主の側に厚意を示す。仏家は争うことは「禁物」、寄らば「大木の陰、長いものにまかれよ主義」のエゴイズムが全行動を支配している。争いをさけないならせめて「従軍布教使」の出張をや

めたら如何と三浦は主張、階級対立激化のなか、大胆な提示を行ったのである。(一九三二年一月) 三浦と協同組合

三浦は、僧侶の経済的行為への進出を考へ産業組合や消費購買事業への参画も提案している。そこでの人々との「協働精神」をうること、「寺院としての社会教育的目的を遂行し得る為の契機」が与えられることに期待した。また、周辺の「地方人に新たに社会的意識を植付けるため」にも「協同事業」が必要とした。

国際的農業恐慌に際して組合事業の経験をもち寺院にも農村にも指導権を掌握することの大切さを主張していた。三浦は地方の一指導者として寺院や農村の改革者として登場する意欲を示していたのである。(一九三二年三月) マルクス主義への最接近

三浦のマルクス主義への接近は、一九三〇年代の恐慌、社会運動高揚期に最高に達した。「理論的是非はともかく社会そのものが既にマルキシズムの決定づけた動向を辿りつゝある」、その「社会的事業に則して吾等の為すべきことを

考へねばならぬ」とした、さらに「教団のもつ組織、機構、内容のすべてを現在の資本主義的状态から改めて社会主義的なものにせねばならぬ。それには当然教団内部の政治闘争の大飛躍が要求されねばならない」とのべた。さらに「肥桶」をかつぐ貧乏寺があり、他方には「年中放逸」の日暮しをする富裕寺がある。この「太れる階級」の田畑、山林、宅地、雑地等々はわずかばかりの貸金回収のなかまぐれ込んだ不当資産である。このような宗教の輩は教団を去るべきであるとした。三浦は、ここに西光万吉やマルクス主義の地に立脚したのである。(一九三二年三月)

さらに三浦はこれまでのマルクスからレーニンの「流血革命」の承認まで言及する。「真実の宗教者は必然的にこの闘争力を把持して居る筈だ」と。(一九三二年八月)

三浦は「反宗教運動への抗弁」に対して「実践を通じて真实性を顯示するの外はない」とのべ、「共産主義の人達が牢獄と死」のなか所信遂行の熱量がある。宗教者にないとしたらウソである。宗教者が「せめて妻子がなかったら」というのは自己欺瞞である。法然上人のように、妻を娶って念仏し、「妨げともならばこれを棄つべし」の言は「全宗教者の信条でなければならぬ」と強調した。共産主義者は妻子をもちながら運動に携っている、そして「飢ゆることを恥とする心そのものこそ恥である」とのべ単なる物的革命にあわせ精神的変革をも主張したのである。(一九三二年一〇月)

マルクス主義の公式主義者は「社会正義といったやうなものまでもが極めて価値のないものゝやうに顧みられない」。しかし「正義や理想を前提にしないで何処に社会運動の立脚点があらうか」。「解雇と闘う労働者、経営悪化にベソをかく重役連、ストックが増加するから餓首するような社会正義にもとるようなことは社会主義者、資本家ともに批判されねばならない」(一九三二年六月)

同じ左翼の宗教批判でも三浦は永田廣志には好意をもった。反宗教闘争同盟準備会機関誌「反宗教闘争」創刊号で、より広く僧侶や牧師、神官等々に読ませたいとい

う。とくに巻末の農村や工場の宗教調査がよい。「敵役たる反宗教同盟の人たちによつて始めてこの調査が試みられるのを見てまことに恥かしい」という。(一九三二年六月)

とりわけ第二号の内容は「前号にまさる出来栄である」とし、宗教そのものに対する「ものより僧侶牧師等に対する」ものであることに注目している。地主、坊主の社会事業のクラクリや坊主と政治家の地域でのデマ活動に対して大阪の修験者の生活の世話、基督教徒の農場経営の紹介など具体的な行為に感じ入った発言をしている。(一九三二年八月)

三浦と水平・融和運動

三浦にとつて融和運動と水平運動の差異は、(一)融和運動が社会的、物質的根拠の打破をせず觀念的行動に終つたこと、(二)差別事件に対して取上げに躊躇し、(三)同胞融和のなかに国家、国民のためなど入れてきたこと。水平社は「国民的融和と人民的融和」(十三回大会)をいうが人民運動の一部として政治的抑圧に対して戦っている。この点こそ肝心な

「封建制」への直接的闘争の契機であることを「融和事業十ヶ年計画」実行者に知ってほしいとのべた。(一九三五年六月)

三浦と転向の問題

このようなきびしい三浦の姿勢からみて佐野学、三田村四郎、徳田球一、中尾勝男など三一年一〇月の共産党裁判事件はこれまでの党のあり方を反省するものであった。とくにこれまで、党は国体変革、私有財産制の否定をいつてきたが党幹部はそこまで言っていないといっていることを三浦は「ウソ」であるとのべて失望した。(一九三二年一〇月)

転向の問題で三浦は興味深い指摘をしている。未決の獄に入っている友人をたずねて「友人が社会的に有っているほどの視野をそこに押拡げて視点の変更を要求した」。そして三浦はさらにいう。「僕は君に転向を促すほどの野暮ではない。唯角度を変えればよいのだ。それができぬほどに今日狭隘な視野しか持たぬ君とは思はない」。友人は「転向」はできないが「角度を変へることならできる」とのべ「転向は良心的にも社会的にも

「罪悪」とのべた。さらに三浦は

「転向」と「転落」とは異なることを力説する。「転落」はこれまでの「社会的視野」をすて「自身自身の利害だけの世界に閉ぢ」こもること、「社会的」には「悲しむべきこと」とし「政治」や「思想の転向」と「社会」のためにはたらくことを分離したのである。いわば実践のもつ革命性を切断した方策を考えたのである。(一九三三年一〇月)

「転向」のはじまり

三浦の言論の上での転向は一九三八年に始まった。二月の「此一戦」の論文がそれで、「戦ひは決定的に勝たなければならぬ」というのである。そのため「不自由も困苦も忍ばなくてはならぬ」とのべた。この勝利で「民族的成長を遂げ得る」ことは愉快な事とのべ軍事は与らぬが「精神力」は「彼国人に克たなくてはならない」。「占領地の広さは台湾の約二十倍」とした。住民に「日本の心」を呑み込ますのは容易な事でない。「精神を取戻せ、宇宙大にまで充溢、不退転なれ、ここに国民精神総動員の核心はある」。(一九三八

年二月)

大陸での戦争のなか国民は自己の利害問題に関心をもっている。「盛り場」は事変下と思われぬ「だらしなさ」である。「今日は議論の時代ではない」、「国家よりも自分自身の議論の方が大切だ」と思っている」という。(一九三八年五月)

「新しい世紀」が「日本民族にとつて輝かしいものであることは決定的に疑へない」が、それには国民が「大死」せねばならない。「梵鐘献納」も戦争に必要なならば実行せねばならない。(一九三八年六月)

支那事変は「東洋の内輪揉め」で「東洋の悲劇」である。その目的は「東亜協同体の建設」にある。「東亜新秩序の建設」にある。「この方向に政治が動くとき宗教者も協力、参加することである。この「歴史的偉業」に奉献せよ」(一九三九年一月)とのべ、三浦の政治的転向は完了したのである。

(了)

本を紹介

神戸ブント 藤本敏夫のうた

プロレタリア文学少年がたどった軌跡

高木伸夫

ひょうこ部落解放人権研究所研究員

この数年、一九五〇～六〇年代に学生運動・社会運動・市民運動を経験・指導した人物の回顧録・遺稿集などが相次いでいる。本書も敗戦直後から九州筑豊、兵庫県養父郡八鹿、神戸と移動しながら、日本共産党を経て共産主義者同盟(神戸ブント)などで活動した藤本の没後に、『原詩人通信』に執筆した「詩文」を中心として編まれたものである。

中に一貫して共産党の活動を続け、触れるか、故意に叙述しないためである(田中真人「日本共産党」五〇年分裂)はいかに語られたか。同志社大学人文科学研究所「キリスト教社会問題研究」第五五号、二〇〇六年一月)。そうすると、除名或いは離党者の証言が、一九五〇年代前半以降の状況を知る手掛かりになる。

戦後に兵庫で日本共産党の活動家として五年の「六全協」を経験し、その後も共産党や新左翼、市民運動に従事した人物の回顧録・遺稿集はそれほど多くはない(拙稿「兵庫社会運動家自伝・評伝・回顧録」について(戦後編)「神戸史学会」歴史と神戸」第三六号、二〇〇三年二月)。

藤本敏夫(一九三三～二〇〇四年)は巻末の略年譜にもあるように、兵庫県養父郡養父市場村で天理教分教会長を務める父親の五人兄弟

月)。しかも、「六全協」の経験を赤裸々に綴ったり、部落解放運動との係わりを示したものは殆ど無い、といって等しい。それは存命

経歴を紹介しておこう。

の次男として生まれ、小学校高等科卒業後、京都で友禅職人見習い、帰郷して書店員などを経て三八年上京。新聞配達の間に通った古書店・東湖堂の夫婦から店番を頼まれ、足掛け二年ほど勤めた。敗戦は奈良海軍航空隊で軍属として迎え、「天と地がひっくり返ったように驚き、三日間涙を流した」（一九四頁及び藤本敏夫「福地幸造先生のこと」という）。

その皇国青年が年末より働き始めた九州筑豊田川炭鉱で、四六年に日本共産党に入党し、筑豊田川細胞を結成。五〇年に帰郷。養父郡八鹿で製材所雑役夫の傍ら共産党但馬地区委員として活動し、被差別部落の青年達とも交流を深める。五三年の時点で「彼（藤本）はその町（八鹿）ではただ一人の共産黨員」だったという（一九二―一九三頁）。

撤きをする程度であったという（二〇三頁）。五四年一二月、兵庫県知事選挙に際してピラを撒き、藤本を含む数名が検挙され、黙秘して戦い、年末に釈放されている（四九―五〇、五三―五四頁）。「六全協」後の五六年に「党の活動で食いつめたかつこうで」（一六七頁）神戸市内に移転。妻の兄が「アカハタ」分局勤務をしていたので、分局事務所二階に住み（同頁）、日雇い労働者の傍ら、全日自労新港分会などで活動。その後、渡辺祐一（国際共産主義者団）の世話で番町の外れの借家に転居（同頁）。この頃から元国際派（国際共産主義者団）のメンバーと交流が続いた。五九年一月、全学連の国会突入後、共産党の方針に疑問を持ち、復党した国際派黨員らと谷川雁講演会、全学連報告会などを企画。このため、共産党県委員会から査問を受ける。翌六〇年三月、共産党西神戸地区党大会でトロツキストとして除名され、（一三三、一三八、一五一頁）、「元国際主義者団の僅かな」（一五一頁）労働者らと「京都（都）大（学）の学生の協力を得て」（同頁）、共産主義者同盟 神戸フロント を結成。翌六一年神戸ブ

ントは戦旗派と谷川雁派に分裂、「わたし（藤本）は『黒寛』（黒田寛一、革命的共産主義同盟）嫌いで『戦旗派』はわたしだけ」（一五四頁）となる。後述する福地幸造宅の隣に転居するの六一年である。しかし、その後に多数派に黒田選挙の応援活動を申し出、多数派も支援しなかつたので藤本は公明党候補に一票を投じ、さらに構造改革派の研究会や革共同全国委員会主催の反戦集會に参加するなど、「論理と組織の世界から見れば支離滅裂」（二〇一、二〇三頁）の行動を取る。六八年には三里塚闘争に参加。八一年、職場で脳梗塞を発病。翌年、再発し、一ヶ月入院。言葉や手足の不自由な中、九〇年頃に寄贈のワープロで投稿を続けた。

特に、加藤は五三年秋から八鹿の病院に赴任後、藤本と家族ぐるみで接しており、横田は神戸フロント解体前後、身近に藤本の去就を知る人物である。さらに、和田は戦前から藤本が接した人々を余す所なく描いており、解説がわりに、先づ読むべきであろう。

ここでは、藤本が力を込めて描写した古書店・東湖堂古藤竜介、福地幸造、八鹿高校教師について触れてみたい。

東湖堂主人、古藤竜介・八重子夫妻は藤本が上京後、一番世話になった。戦後も懐かしさと尊敬を込めて、何度も古藤夫妻の人柄を述べている。その古藤の兄、駿介は一九二六年、福岡連隊差別糾弾闘争に活動家の一人として協力している（一九二〇、三三三頁）。藤本も紹介しているが、木村京太郎は「私は、こうした毎日の忙しい日々ではあつたが、寸暇をみては、福岡市の日本農民組合連合会や、全日本無産青年同盟支部を訪れ、あるいは当時八幡市にあつた日本労働組合評議会の九州評議会本部、労働農民党福岡県連などに足をのばして、藤井哲夫、愛甲勝矢、楠元芳武、日高政夫、古藤駿介など

本書は、一、元炭鉱夫の詩文
二、神戸フロントの遺文の二章に分かれ、それぞれ掲載順に二〇（計四〇）の「詩文」、「遺文」が収録されている（二章の権美智子虐殺糾弾ピラ除く）。また、「藤本敏夫への伝文」として加藤昭治、川上昂三（横田雄一）、井之川巨と編者の和田喜太郎が文章を寄せ、略年譜と和田の「あとがき」で構成されている。

の活動家と密接な連絡をとり、水
平社の糾弾方針や運動の現状など
について話し、彼らにそれぞれの
組織を動かしての協力を求めた。
（木村京太郎『水平社運動の思い出』
上、部落問題研究所、一九七二年七月
一八二―一八四頁）のである。

その弟、竜介も左翼運動に拘わつ
た。既に中学生の時から肺結核に
侵されているにもかかわらず、日
本プロレタリア芸術連盟福岡県支
部常任書記として活動中、二八年
の三・一五事件で検挙され、懲役
二年に処されている（二〇、三四頁）。
三七年に竜介は兄から東湖堂を譲
り受け、夜店から健康のため同じ
大森に店を構えた。これ以後、病
気が一進一退する中、店番は出来
ず、夫人が代わって店番をするが、
子供が生まれ、店と夫・子供の世
話で行き詰まり、店に立ち寄って
いた藤本に店番を頼んだのである。
駿介・竜介兄弟の左翼運動参加経
験は当然ながら藤本にも影響を与
えた。藤本は、『プロレタリア』、
『ブルジョア』という言葉、意味
を知ったのはその頃で驚きであつ
た。（二三頁）と記している。

雑誌『機械工の友』が東湖堂を発
行所としていると、次のように書
きとめている。「また雑誌で『機
械工の友』が店にあつたが、発行
所は東湖堂になつていた。この
『友』が当時どんな役割をしたの
だろうか。」と（二九、三〇頁）。
『機械工の友』は名目上、技術雜
誌として日中戦争が始まつた翌年
の三八年九月に日本反帝同盟・共
産主義青年同盟・プロレタリア科
学研究所などで活動した経験のあ
る木内誉治が創刊した。この雑誌
は日本共産党の最後の中央委員・
袴田里見検挙後、第一・第二次共
産党再建指導部と密接な関係を持
つて出発したのである（吉田健二、雜
誌『機械工の友』と『機械工の知識』
（一） 戦時抵抗の一形態、大原社会
問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』
四二五号、一九九四年四月、二〇―三
九頁）。雑誌を経営・編集する機械
工の友社は「経営を合法舞台に生
き残らせるために、最大の努力が
払われ」（同上、三八頁）た結果、
関係資料が散逸したため発行部数・
購読者数・取り次ぎ店の変遷及び
経理関係の資料は分からない。し
かし、東湖堂が取り次ぎ店の一つ
であつたことは間違いないである

う。
次に、県立湊川高校教師・福地
幸造との関係について。藤本は
「私のここから敬愛する福地幸
造先生」（一八一頁）と書いている
が、和田の「解説」（藤本敏夫と
詩をめぐる人々）ほどには詳しく
触れていない。それは、「福地幸
造先生のこと」（兵庫解放教育研究
会『むらぎも 臨時特集・福地幸造』
一九八〇年七月、三三―三五頁）が本
書には収録されていないからであ
ろう。
同稿によれば、藤本と福地の出
会いは山陽電車地下化で長田交差
点・番町の外の家（渡辺祐二の世話
による）から立ち退きを迫られ、六
一年八月、「お盆がすんだあと、
山の中に、ひっこんだ所が、たま
たま先生宅の隣」であつた縁から
である。直接的には「日本読書新
聞」に連載された福地の「部落民
兵士の手記」を読み、「八鹿で出
入りしていた、下網場（未解放部落）
の青年が話をしていた。さんの
兵隊時代の話を高教組宛にハガキ
で送り、その返事を受け取った
後に付き合ひが始まつたという。
六〇年三月に藤本は共産党を除名
になつており、党员と公然に付き

合うのは困難であつた。福地も
「離党」したと聞き、親交を深め
たのである。福地は次のように、
藤本を紹介している（福地幸造「退
職挨拶 幕の引きかたにもいろいろあ
る 野次と笑いと長い拍手のなかで」
前掲『むらぎも 臨時特集・福地幸造』
一九八〇年七月、七頁）。
藤本さんは、わたしの家の隣
りに、十年ばかり住んでいた
労働者です。元・共産党员で
す。彼は除名組です。わたし
は離党組です。（中略）いや、
彼の方がわたしより偉かつた
ということですよ。（中略）党の
中で、あばれたということだ
す。「部落民兵の手記」と
いう文を三回ほど連載で書い
ていたときに、「非常に大事
なことだから、是非続けて欲
しい」という葉書が来たわけ
です。藤本敏夫 と書いて
ある。住所を見ると、わたし
の住所と同じ住所なんです。
（中略）おかしいなァーと思つ
ていたら、隣なんです。（中略）
うちからは、藤本さんの家は
まる見えなんで、労働者やと
思いますわなあ。ところが本
が山ほど積んである。これは

恐ろしいですわなあ。何物や、と思うわけです。かなりの期間、声をかけなかったんです。それから、何のキツカケかな、（藤本は）猫が好きでね。白状しよるんやナ。「うちの猫が、あんたとこの魚食わえてきよるんや。あんたとこの娘が「こりやー！」と言うて追わえてきよったけど。あれ、食べてもたで」と言うわけです。（中略）そんなおつきあいがまだ続いてるのは、この一人だけです。（後略）

藤本が鷺町に移転したその年（六年）の七月八日に部落解放同盟支部準備会が結成され、九月一日に番町支部が正式に長田公民館で結成された。折から部落解放要求貫徹請願国民大行進が進められていた最中であつた。恐らく、福地との交流によつて番町の解放運動に積極的に加わつたのである。六六年八月、同対審答申国民大行進に参加。当時、全日自労分会教宣部長と部落解放同盟番町支部会計監査などを努めていたという（グラビア五頁では行進を六四年としている）。

最後に、但馬・八鹿高校の教師

について触れておこう。八鹿事件以後、七五年二月に養父町長選挙で争われた保守の小野山氏（共産党除名）と、共産党から立候補・当選した浅倉氏が「共に日（本）共（産）党員で卵卸の仲のいい仲間、一時は『日本の声』派の主張に共鳴したこともあつた」などは和田の「解説」に詳しいが、藤本は共産党シンパであつた西岡幸利（八鹿事件当時、兵庫高教組委員長）に関する「六全協」前の知られざるエピソードを証言している（一六九頁）。

藤本はこの外にも、筑豊の永末十四雄・上野英信、「造反」教師・松下昇、六〇年安保闘争時の全学連委員長唐牛健太郎、神戸で六〇年代にベトナム反戦運動を指導した小島輝正（神戸大学教授）、さらに、五〇年分裂当時、国際派に所属し、「六全協」後、共産党神戸市委員・県委員を経て六一年、八回大会前後に離党、構造改革派（第二次『現代の理論』編集委員、統一社会主義同盟など）に加わつた詩人・直原弘道などを取り上げている。一文学青年の「連帯を求め、運動を共有したいと欲する」生涯の意味を熟読してほしい。

（和田喜太郎編、アットワークス刊、二〇一〇年二月、一、八〇〇円）

本の紹介

石井光太著『ルポ 餓死現場で生きる』

渡辺 毅
（東九条マダン事務局長）

不正に満ちあふれた暗黒社会の中で、虐げられ、不条理な境遇を強いられて生きる人間たちの姿を目の当たりにしたとき、多くの心ある人々は正義に目覚めるだろう。こんなのはおかしい、不正を糾さなければならぬ、と義憤を抱き、そんな心ある人々の中から、虐げられてきた人間たちのためを思って正義の行いを遂行しようとする人が現れる。この正義、よほど浅

いはなればならない、と義憤を抱き、そんな心ある人々の中から、虐げられてきた人間たちのためを思って正義の行いを遂行しようとする人が現れる。この正義、よほど浅

はかだつたり早合点だつたり独善的だつたりする場合を除き、たいていはなるほど確かに正義の名に値するものである。だが、にもかかわらず、ときとして正義は無効であり、「余計なお世話」にさえなつてしまつことがある。

ハンセン病療養所・星塚敬愛園の入所者であつた作家の島比呂志さんから「世界に類をみない悪法であるらい予防法を放置してきた法曹界の責任や如何に？」と問い質す手紙を受け取つたことがきっかけで、徳田さんはこの問題と関わり始めたといふ。

念のため説明を加えておく。らい予防法は長らく、ハンセン病者の社会からの強制隔離を正当化する根拠となつてきた法律である。この病は、癩と呼ばれた昔から、罹患すると外貌に変化を生ずる場合が多いゆえに、何らかの祟りか血統の問題に起因する宿病と見なされ、忌避されてきた。明治以降においても優生思想の観点から、「優秀な」国民国家を建設する上でハンセン病者は目障りな存在とされ、人目につかぬよう各地の療

養所と見なされ、人目につかぬよう各地の療

養所と見なされ、人目につかぬよう各地の療

養所へ隔離収容する政策が進められた。それほど恐れられ嫌われたハンセン病であるが、実際は、感染力の弱い菌による感染症であり、感覚麻痺を生ずることから火傷等の二次的疾患を招来するケースが少なくないとはいえ、それ自体が罹患者を死に至らしめることは絶無といつていいほどの、さほど恐るるには足らない病なのである。しかも、第二次大戦中に米國でプロミンという特效薬が開発されたことで完治可能となり、現に我が國の療養所入所者たちも次々と完治していった。にもかかわらず、日本は隔離政策をやめず、戦後に至つても患者を続々と療養所へと拉し去り、それまでの癩予防法に代わつて一九五三年に新たに制定されたらい予防法にも、強制隔離は当然のごとく盛り込まれたのである。

らい予防法が廃止されたのは一九九四年のことであった。徳田さんは、理不尽極まる悪法を放置してきた法曹界の責任を痛感した。贖罪意識を胸に抱きつつ、國のハンセン病政策の誤りを追及するハンセン病違憲国賠訴訟の原告弁護団に加わった。

そんなある日。

徳田さんが長島愛生園で、入所者たちに国賠訴訟原告団への参加を呼びかけていると、ある入所者が猛然と次のように言い放つたというのである。「あなたたちに何が分かる？療養所が悪のようにつが、私たちは療養所があつて救われたのだ。療養所がなかったら私たちは野垂れ死にしていたんだ！」

自分たちが「正義」を遂行しようとしていたことに、そのとき気づかされた、と徳田さんは言つた。この「正義」は、理不尽な隔離政策の「不正」を糾そうとするもので、決して間違つたものではなかつたが、これを「余計なお世話」と感じる人もいたわけである。療養所で生きることを余儀なくされた人々の中には、強いられ理不尽な境遇を恨み悲しみ続けるよりも、これでよかつたのだ、むしろ世間の迫害から隔離してもらえたことを感謝すべきなのだ、などと思うことで、己が人生に対する肯定感と日々の安寧を得ようとしてきた人も少なからずいたのである。そういう人たちにとっては、隔離政策の誤りを糾そうとする正義は、たといそれが紛うことなき正義で

あつても、なかなか直ちには受け入れがたいものだったのである。

徳田さんはこのとき、正義がとくとして無力であることを知つたのである。それでも信じる正義があるから、徳田さんはその後も国賠訴訟原告弁護団をはじめハンセン病問題に関わり続けてきた。と同時に、正義が無力となる現実というものがあることを、一方では常に忘れまいとしてきたのである。

と、ここでようやく私は、『ルポ 餓死現場で生きる』の紹介にとりかかろうとするのである。この本の著者もまた、「正義が無力となる現実というものがあることを、常に忘れまい」としているのである。

著者の石井光太氏は、長年にわたり世界各地の貧困地域の人々に對する取材を重ねてきたジャーナリストである。南アジアやアフリカ（とりわけサハラ砂漠以南）のスラムや路上生活者の群れに入り込み、慢性的な貧困と飢餓に覆われ、病や薬物や性犯罪や殺人の横行する社会の中で暮らす人々と対話し、友誼を交わし、ときに寝食を共にしながら、生きとし生ける彼らの

ありようをルポしてきた。

石井氏の胸の内にも、むしろ「正義」はある。だからこそその正義に衝き動かされ、世界の貧困地域の凄惨な実情を世に知らしめるべく、生命の危険を省みずに取材活動を続けているのであるが、と同時に、現場の現実を前にして、明らかに、正義の無力を思い知らされてもいるのである。どんなに正しかろうとも、貧困の現場にある人々の生の原理からすると、「余計なお世話」ではない、正義。

本書では、主として貧困地域の児童労働の実態が報告されているが、著者は南アジアやアフリカの各地で、児童売春にたざざる未成年たちとも多数会つている。

ILO（国際労働機関）は、売春やポルノにたざざる児童労働者が世界に百八十万いるとしているが、これは専門的に性産業に従事している人数であり、物売りの子どもなどが副業的に売春している数を加えると、数倍にふくれ上がるという。家族がブローカーなどを通じて娘を売る、娘が家計を助けるため自発的に売春する、家政婦やウエイトレスとして雇用された先で売春を強要される、など

いくつかのケースがあるものの、いずれにせよ少女たち（ときには少年たちも）は、貧しさゆえに売春をしている。

痛ましいことだ、と私は思う。多くの人が思うだろうし、著者もそう思っている。児童売春など断じてあってはならないことだ、と内なる正義の声が呟く。あるいは人によっては声高に「NO！児童売春」と正義の叫び声を上げるであろう。だが著者は、現場で、売春にたずさわっている少女たちを目の当たりにして、そんな叫びは無効だと感じずにはいられない。彼女たちの現実を知り、「もし私が女の子の立場なら売春婦になることを選ぶかもしれない」と思わずにはいられない。

サービスマスターや家政婦に住み込みで雇われた少女たちに対し、少なからぬ雇用主が性行為を強要する。食事や寝場所を提供してもらっている少女たちには、拒むすべもない。給料も安く逃げ場もない。こんなことを強いられているくらいなら、「いつそのこと売春したほうが割に合っている」と考える少女たちがいる。エチオピアで著者は、売春婦が集まるバーの店員から次

のような話を聞いた。

「売春婦になれば、それなりに儲かるよ。十六歳以下の若い子なら一晩に三十ドルぐらい稼げる。金さえあれば、外国に移り住むことも、店を開くことも、家族を助けることもできる。思い切り着飾ることだってできるだろうよ。家政婦のまま月に十ドルを稼ぐか、売春婦として成功の道を切り開くか。彼女たちがどっちを選択するかは明らかだろ」

そして著者は実際にアデイスアベバで、成功した売春婦、ラミラに会った。彼女は売春で得た金を元手に市内に何軒もの美容室を開いた。そして週末になると、リッチな身なりで、若い売春婦たちが集うバーに車で乗りつける。後輩たちの悩みに耳を傾け、ときには小遣いを渡す。後輩たちはラミラを理想の先輩として尊敬している。ラミラは言う。

「働いていた先で何年も性的暴行を受け続け、悩んだ末に自分の意思で売春婦になることに決めたの。まだ十四歳のときだった。それから十年近く一生懸命働いてお金を貯めて、今のお店を開き、成功した。私はそんな自分の過去を

否定したくない。自分で決めて、自分でやって、自分で成功したことに誇りをもって生きていきたい。だから、私は過去を隠して生きるつもりはないし、ここにいる売春婦たちに『私のように成功して』って言うてあげたいの。今の仕事を恥ずかしがるのではなく、自信をもって成功につなげればいいってことをみんなに教えてあげたいのよ」

売春は最善の選択肢ではないにせよ、少女たちにとって、将来の可能性を秘めた、少なくとも次善の選択肢ではある。ラミラのこの言葉を前に「NO！児童売春」の声は無効である。どんなにそれが正しかろうとも、貧困地域の現実を前に、私たちの正義はときに無力であり「余計なお世話」でさえある。

正義の無力。それは例えば次のような場合にも痛感させられることである。

著者がケニアのコーヒー産地の某村を訪れたさい、女の子の姿が非常に少ないので、村人にわけを聞いてみると、次のような言葉が返ってきたという。

「数年前に、欧米のNGOがやつ

てきてプランテーションから子どもを掃いたんだ。そのせいで、子どもは地元で働けなくなっちゃった。それで仕方なく、他の町に家政婦として出稼ぎに行くことになった。それで若い女の子が減ってしまったんだよ」

つまり、欧米人たちが来て、子どもたちがコーヒー農場での労働に従事させられているのは非人道的だとして「NO！児童労働」と正義の声を声高に上げたのである。欧米人たちが正義を遂行したことで、子どもたちは農場で働けなくなっちゃったが、児童労働をなくしても親の収入がにわかには増えるわけではない。子どもが働かなければ、各家庭の生計は破綻する。だから子どもたちは、欧米人たちの正義の声が届かぬ余処の町へ出て、働き続けなければならぬ。

本当は、どのみち働くなら地元の村のコーヒー農場で働くほうがましなのに。余処の町で家政婦をすれば、先述のように、雇用主などから性暴力を受けたり、売春を強要されたりする危険にさらされることになる。

正義の無力。いや、むしろ悪しき結果をさえ招きかねない、正義

の負の力。貧困地域では、児童が労働することは、理不尽か否かの問題ではない。人々が生きていく上で、どうしても必要不可欠なことなのである。

本書では、児童結婚についても報告がなされている。世界の貧困地域では、十五歳以下の子どもの多くが、本人の意思に基づかない結婚を強いられている実態がある。イスラム圏の国では、まだ年端もいかぬ少女が、五十代の男の何番目かの妻として嫁ぐ、といったケースがある。婚礼にさいして多額の結納金が交わされる習慣が、こうした児童結婚を支えているのである。貧しい家庭の娘が、崩壊寸前の家計を救うために、富裕な中年男の許へ身売りさせられているのである。

著者は憂慮する。「児童婚の問題は、子どもの人権だけにあるのではなく、体が未成熟なときに性行為をしたり、出産したりすると、母子共に生命の危険にさらされる確率が格段に上がります」。中東のイエメンでは、結納金目当てに結婚させられた十二歳の少女が、結婚のわずか三日後に死亡してしまっただ。性行為を強いられて

子宮が破裂し、大量出血して死んでしまったのである。

ただ、と著者は言う。結納金欲しさに娘の結婚を強いたこの家族を、批判することはできない、と。

生活困窮が即ち死を意味する状況の中で、どのみち娘を売らざるを得ないのなら、犯罪組織につながっていることが明らかなら人身売買のブローカーに身を預けるよりは、地域の伝統に則って娘を比較的富裕な家へ嫁がせるほうがまだしもましな選択肢なのである。それで娘は少なくとも食いつぶされることはないし、おまけに結納金も入ってくる。「両親は困窮した生活の中で最善を尽くしたともいえるのです」。

アフガニスタンの寒村で地主の三番目の幼妻にさせられた十一歳の少女は、学校へも通えず、日々過酷な家事労働をさせられている彼女のことを憂慮したNGOスタッフの問いかけに対し、以下のように答えたという。

「家になんて帰りたくないよ。だって、ここにいれば、おいしいご飯も食べられるし、好きな服だつて買ってもらえるでしょ」「貧しい若い男性と結婚したつて、生き

ていけるかどうかは分からない。家にいたときのようには飢えることになるかもしれない。それなら今の生活を続けていたほうがずっといい」

親にとつても子にとつても、児童結婚はときとして、貧困から脱却するための手段なのである。著者は言う。

「私たち外国人が、児童婚と聞いただけで顔をしかめて『許されることじゃない』』というのは容易いことです。しかし、私たちはそういう前にまず彼らが直面している貧困がどのようなものかを知る必要があるでしょう」

要するに、そういうことなのである。

児童売春、児童労働、児童結婚、これらが非人道的であることは明らかだけれども、だからといって、第三者がこれらを撤廃すべく正義を遂行すれば、貧困地域の人々は、たちまちにして餓死の危機に瀕するのである。正義に殉じて窮死するか、それとも非人道的営為に絶つて飢えをしのぐか。答えは一つ。人はまず生きねばならないのである。

正義はときとして無力である。

しかし、それでもなお、著者はきつと、絶望したくはないのである。

正義の無力化する現実を思い知らされながらも、信ずる正義をなお信じる。ただ、それは上から降り注ぐようなものであってはならない、というだけである。心ある人はともすれば、虐げられている人々を救うために、正義をいち早く遂行しようとする。神のように。だが人は、神ではない。他者に高みから正義を注ぎかけるような、そんな神のような真似を人がしてみただころで、現実を見失うだけである。

本書の著者の石井氏や、おそらくは先述の徳田弁護士も、そのことに気づいた人たちなのである。信ずる正義は確かにあるが、その正義、どうすれば本当に他者をも幸せにできるのか。高みに立っていては解らないから、相手と同じ地平に立ち、相手に寄り添って考えてみようと思っている人たちなのである。

(筑摩書房刊、新書版、二〇一一年四月、八七〇円)

／軍都広島「娼妓」たち 明治期の新聞記事から
水越紀子

日本社会とエスニシティ

在日フィリピン人社会の現状分析 第一世代の加齢・高齢化と新日系人の流入を中心に 高畑幸／外国人に対する寛容度の規定要因についての考察 接触経験とネットワークの影響を中心に 伊藤泰郎

資料紹介 中国人と日本人にみる「歴史認識」の差異について 中国の高等学校歴史教科書を中心に 弘中政義

部落解放研究 191 (部落解放・人権研究所刊, 2011.3) : 1,400円

特集 非人・非人番の生活世界

天王寺村における転びキリシタンと類族の動向 小野田一幸／撰河の在方非人番と在方小頭 中尾健次／紀州藩松坂領における非人番及び惣廻りについての小考察 寺木伸明

伊予小松藩における「かわた」の尋ね方・召捕り・留置について 『伊予小松藩会所日記』の被差別民関係記述より 水本正人

森秀次と融和運動 北崎豊二

佐野学における唯物史観の受容と部落問題の発見 黒川伊織

高知県水平社と国沢亀 吉田文茂

部落解放ひろしま 88 (部落解放同盟広島県連合会刊, 2011.1) : 1,000円

特集 部落差別の歴史と闘い 現在を考えるために 2

部落問題研究 194 (部落問題研究所刊, 2010.11) : 1,111円

近代大阪の地域支配と社会構造 近代都市の総体的把握をめざして 飯田直樹

19世紀大阪の非人身分 代勤願いと病氣療養願いから 塚田孝

泉州南王子村における人口増加と出作・小作 三田智子
史料紹介 北原泰作文書(その4) 八幡事件関係史料 (愛媛県宇和島市) 本井優太郎

部落問題研究 195 (部落問題研究所刊, 2011.1) : 1,111円

共同討論 「近世身分社会の比較史」

明清期の身分と日本近世の身分 岸本美緒／近世朝鮮の身分社会 日本との比較の試み デビッド・ハウエル／カースト制度と身分制度、比較歴史学の可能性について ダニエル・ポツマン／身分・身分的周縁の比較類型把握 吉田伸之／共同討論 近世身分社会をめぐる 岸本美緒, デビッド・ハウエル, ダニエル・ポツマン, 吉田伸之, 井上徹, 大山喬平, 鈴木良, 森下徹

史料紹介 北原泰作文書(その5) 部落解放全国委員会関係史料 西尾泰広

ライツ 140 (鳥取市人権情報センター刊, 2011.1)

今月のいちおし!! 『限界集落～吾の村なれば～』(曾根英二著) 川上学

リベラシオン 140 (福岡県人権研究所刊, 2010.12) : 1,000円

特集 韓国併合100年を機に考える

全九州水平社90周年に向けて 森山沾一

精一杯生きてきた 宮本秀雄さんに訊く 1 川向秀武

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 7 身分と職業の関係はどうだったのか 石瀧豊美

歴史地理教育 769 (歴史教育者協議会編, 2011.1) : 680円

高校の授業 日本史 中世被差別民をどう教えたか 八耳文之

和歌山研究所通信 38 (和歌山人権研究所刊, 2011.1)

視座 人間の尊厳と人間中心主義 村田恭雄

人権と多文化共生 韓国併合100周年を迎えて 鄭甲寿

2011年度部落史出張講座 地元で学ぶ地元の歴史 in 田中

- 第1回 5月27日(金) 「河原者 マルティプルの面目 名を残した川崎者」
辻 ミチ子さん(元京都文化短期大学教授)
- 第2回 6月10日(金) 「田中部落・改善運動から融和運動へ」
朝治 武さん(大阪人権博物館学芸員)
- 第3回 6月24日(金) 「戦後の部落解放運動と田中部落」
井本 武美さん(朝田教育財団評議員)

時間: 午後6時30分～8時30分

場所: 左京西部いきいき市民活動センター第1会議室(旧養正コミュニティセンター)
京都市左京区田中玄京町149 TEL: 075-791-1836 京阪出町柳駅から徒歩8分

参加費: 無料 協力: 部落解放同盟田中支部

～参加希望の方は、当資料センターまで電話・FAX・電子メールでご連絡ください～

- 私と東之阪～私の子どもとその友だち、そしてその親たち～ 松谷操
 人権と福祉のまちづくり 松塚信夫
 講義録 現代社会の生存権とは 佐々木育子
 ねっとわーく京都 264 (ねっとわーく京都21刊, 2011.1) : 500円
 ウォッチャーレポート 78 一部勝訴確定! 解放センター、みかげ会館の敷地無償使用の違法性裁判 奥村一彦
 ねっとわーく京都 265 (ねっとわーく京都21刊, 2011.2) : 500円
 ウォッチャーレポート 79 なかなか破れない裁量の壁 岡根竜介
 東日本部落解放研究所ニュース 79号 (東日本部落解放研究所刊, 2011.2)
 前理事長内田雄造氏ご逝去のお知らせ
 ヒューマンJournal 195 (自由同和会中央本部刊, 2010.12) : 500円
 融和運動の再評価 11 行政闘争の裏側 宮崎学
 ヒューマンJournal 196 (自由同和会中央本部刊, 2011.3) : 500円
 野中先生への誤解を解く 平河秀樹
 融和運動の再評価 12 同対審答申の立場を考える 宮崎学
 ヒューマンライツ 274 (部落解放・人権研究所刊, 2011.1) : 525円
 走りながら考える 117 人口減少時代がもたらす衝撃
 部落解放運動の根本的改革を 北口末広
 知的障がい者に導かれた企業経営と国への期待 大山泰弘
 ほんとうに「かわいそう」からはじめてしまった
 「『ことば・表現・差別』再考」から見えてきたもの
 浮穴正博
 ヒューマンライツ 275 (部落解放・人権研究所刊, 2011.2) : 525円
 「ことば・表現・差別」再考 反響編2
 走りながら考える 118 部落解放運動改革の方向性 社会の劇的变化をふまえて 北口末広
 部落解放運動と差別撤廃に向けた法整備 1 部落問題の概況と特措法制定まで 友永健三
 ヒューマンライツ 276 (部落解放・人権研究所刊, 2011.3) : 525円
 土地差別調査事件の真相究明と今後の課題 赤井隆史
 走りながら考える 119 現代のオール・ロマンス事件 土地差別調査事件が示すこと 北口末広
 座談会 大学における、これからの同和・人権教育、研究のために 若手研究者が先輩研究者に学び・考える
 阿久澤麻理子, 内田龍史, 熊本理抄, 廣岡浄進, 本郷浩二, 松波めぐみ
 部落解放運動と差別撤廃に向けた法整備 2 1985年から今日まで 友永健三
 ひょうご部落解放 139 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2010.12) : 700円
 部落解放研究第31回兵庫県集会報告書
 部落解放 640号 (解放出版社刊, 2011.1) : 1,050円
 第41回部落解放・人権夏期講座報告書
 部落解放 641号 (解放出版社刊, 2011.2) : 630円
 特集 ルポ・部落の就労
 困難のなかで自分を保ちながら 熊本県の部落にみる就労状況 社納葉子 / 雇用状況の劣化のなかで 兵庫県・上の島の若者たちはいま 西田英二 / 皮革、ステンレス、建設、そして福祉へ 栃木県の部落の企業・就労の現在 北之口太
 本の紹介 青い芝という存在感の向こう 角岡伸彦著『カニは横に歩く 自立障害者たちの半世紀』 小林敏昭
 まちかどの芸能史 1 前口上 村上紀夫
 都市型部落における労働・生活とアイデンティティ 「2009年住吉地域労働実態調査」から 内田龍史
 部落の文化と歴史 草津温泉 2 部落史からみた草津温泉
 「湯の花」は部落が生んだ文化 川元祥一
 働くことも生きることもみんなです! 映画「はながゆく。」 赤阪ハナ, 吉永香織
 奇蹟の人々 撫順戦犯管理所 豊田直巳
 部落解放 642号 (解放出版社刊, 2011.2) : 1,050円
 部落解放研究第44回全国集会報告書
 部落解放 643号 (解放出版社刊, 2011.3) : 630円
 特集 障害者の「介助」から「支援」を考える
 本の紹介 『花と死者の中世 キヨメとしての能・華・茶』 (中島渉著) 吉田栄治郎
 厳しい現実を把握するひとつの試み 佐賀県の被差別部落生活実態調査から見えてきたもの 妻木進吾
 インタビュー 新聞記事の集積から見えてくるもの 『和歌山の部落史 史料編 近現代1』を編纂して 小田康徳
 部落の文化と歴史 草津温泉 3 三右衛門の仕事 = 役とハンセン病者 川元祥一
 ケニア 路上に生きる 高木忠智
 まちかどの芸能史 2 千秋万歳の頃 村上紀夫
 部落解放 644号 (解放出版社刊, 2011.4) : 630円
 特集 外国人参政権 わたしはこう考える
 本の紹介 黒川みどり編著『近代日本の「他者」と向き合う』 ひろたまさき
 瓦解した狭山事件確定判決の筆跡論 上申書によって暴かれた書字条件差異論の非科学性 中北龍太郎
 朝鮮学校と高校無償化問題 日本政府と大阪府の政策を問う 高龍秀
 岩井好子先生を悼む 学ぶことの原点を求めた夜間中学教師が刻んだ足跡 川瀬俊治
 まちかどの芸能史 3 千秋万歳の受難 村上紀夫
 部落の文化と歴史 草津温泉 4 近代に始まる隔離と差別 川元祥一
 部落解放研究 17 (広島部落解放研究所刊, 2011.1) : 1,000円
 部落解放の運動と研究の提起
 体制に絡め取られていく部落解放運動 新自由主義と融和主義攻撃の中で 岡田英治 / 「同和对策審議会答申 (同対審答申)」研究のための覚書 1 藤田成俊
 統制と周縁化
 暴走族をめぐる排除の論理 ゼロトレランス政策は、いかに広島市の暴走族排除に適用されたのか 打越正行

市と京都市の取材経験から 寺園敦史

月刊地域と人権 324 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.2) : 700円

特集 全国人権連第4回定期大会

地域と人権京都 589号 (京都地域人権運動連合会刊, 2011.1.15) : 150円

いまに残る町内のパワースポット (崇仁編)

地域と人権京都 590号 (京都地域人権運動連合会刊, 2011.2.1) : 150円

役割を終えた同和对策の実態解明と終結課題 1 石倉康次

地域と人権京都 591号 (京都地域人権運動連合会刊, 2011.2.15) : 150円

役割を終えた同和对策の実態解明と終結課題 2 石倉康次

ちくま 478 (筑摩書房刊, 2011.1) : 100円

青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 44 第十章 モスクワの留学時代 1 沖浦和光

ちくま 479 (筑摩書房刊, 2011.2) : 100円

青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 45 第十章 モスクワの留学時代 2 沖浦和光

であい 585 (全国人権教育研究協議会刊, 2010.12) : 150円

第62回研究大会特集

であい 586 (全国人権教育研究協議会刊, 2011.1) : 150円

人権文化を拓く 162 人権教育と道徳教育 島恒生

であい 587 (全国人権教育研究協議会刊, 2011.2) : 150円

人権のまちをゆく 54 秀吉、朝鮮侵略の拠点名護屋城と佐賀県の被差別部落 第62回研究大会に参加して 日比野裕司

人権文化を拓く 163 まずはおとなたちが「子どもの権利条約」を読んでみよう 住友剛

同関協だより 45 (真宗大谷派同和関係寺院協議会刊, 2011.1)

現地研修レポート

講義1 「大谷派糾弾会で願われたもの」小森龍邦氏 / 講義2 「真宗教学と部落問題」小森龍邦氏

奈良県立同和問題関係史料センター研究紀要 16 (奈良県教育委員会刊, 2011.3)

中世大和「盲目」に関する研究 「西金堂大行事方引付」を主材料として 山村雅史

奈良町木辻遊廓史試論 井岡康時

部落差別撤廃運動の思想的基盤 中村甚哉における伝統の継承 奥本武裕

民俗社会の地域的差異について 庚申塔婆の形状とその分布 津浦和久

「部落史の見直し」の回顧と展望 吉田栄治郎

中世大和の葬送と墓制 狭川真一

奈良人権・部落解放研究所紀要 24号 (奈良人権・部落解放研究所刊, 2006.3) : 1,500円

シンポジウム記録 「宗教と人権～ともに生きる地域づくりのために～」

講演録 「企業における人権・同和問題～人権ってなんだろう～」 竹内良

(21世紀のキーワード?) ESDとは何でしょう? 「国連持続可能な開発のための教育の10年」について ESD奈良部落出身青年のアイデンティティと社会関係 奈良県連青年部調査結果から 内田龍史

妙覚寺本堂再興が語る世界 「当時来由再興因縁記」から 寺澤亮一

記憶のなかの由緒 1 残された伝承から 吉田栄治郎 史料紹介 下之庄小学設立を伝える文書 『奈良県被差別部落史』史料集第五巻から 中村泰彦

奈良人権・部落解放研究所紀要 25号 (奈良人権・部落解放研究所刊, 2007.3) : 1,500円

シンポジウム記録 「人権相談の充実に向けて」

講演録 「おおきな忘れ物 童話づくりと子どもたちとのふれあいから」 なかじまゆたか

インクルーシブ教育ってこれじゃないのかな 中村工

同和行政をめぐる1949・50年奈良県議会の質疑 吉田栄治郎

奈良人権・部落解放研究所紀要 26号 (奈良人権・部落解放研究所刊, 2008) : 1,500円

これからのまちづくりを展望する 人権のまちづくりのために 中川幾郎

ハンセン病と意識の壁 池田士郎

社会を変える原動力としてのNPO 村上良雄

大和国の被差別民について 1 夙の場合 吉田栄治郎

書評 地域史叙述としての<寺史> 廣岡祐涉著 『大鳥山 明西寺史』を読む 奥本武裕

講義録 「犯罪被害者やその家族の人権 松本サリン事件がもたらした私の生活感と社会観」 河野義行

人権ゆかりの地をたずねて フィールドワーク事業の取組から 秋口靖広

奈良人権・部落解放研究所紀要 27号 (奈良人権・部落解放研究所刊, 2009) : 1,500円

試論・郷土誌のなかの部落 葛下郡上牧村の場合 吉田栄治郎

明治初年の地域社会と地方行政に関する研究ノート 井岡康時

実態調査と部落解放運動の今後の方向について 伊藤満

人権が共存するまちづくりを考える 人権のまちづくりと自治 共同体活動のなかにある相互変革 (啓発) 寺澤亮一

書評 あらためて戦中の歴史を直視しよう! 朝治武著 『アジア・太平洋戦争と全国水平社』を読む 金井英樹

講演録 日本の貧困問題と自己責任論 (湯浅誠さん)

奈良人権・部落解放研究所紀要 28号 (奈良人権・部落解放研究所刊, 2010.3) : 1,500円

差別と排外を撃つ多文化共生の教育実践を! 奈良・在日外国人教育運動史序説 金井英樹

明治前半期被差別部落出身青年の修学経験 中村諦梁を中心に 奥本武裕

人権が共存するまちづくりを考える 東吉野村から始まった地域活性化活動 滝口俊二

戦国時代の結婚 田端泰子

人権の“館” 松本治一郎記念館 仲尾宏

研究所通信 379 (部落解放・人権研究所刊, 2011.3) : 100円

内田雄造先生を追悼する 寺川政司

国際人権ひろば 95 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2011.1) : 350円

特集 健康の権利を考える

こべる 215 (こべる刊行会刊, 2011.2) : 300円

ひろば138 無言館感傷紀行 工藤力男

出版・書店の現場から 2 いま本を読むということ 影山秀和

自分史のこころみ 8 Kへの手紙 森永都子

花とマグマ 絵と詩 森永都子

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 216 (こべる刊行会刊, 2011.3) : 300円

ひろば139 ゆったり生きる 自閉症の彼と出会って 田井外志雄

播州からの便り 6 問い問われながら生きる関係 福岡ともみ

いのちを生きる 38 「自分にできることをする」ということ 長谷川洋子

花とマグマ 絵と詩 森永都子

濃水飛山記 藤田敬一

こりあんコミュニティ研究会通信 8 (こりあんコミュニティ研究会刊, 2011.2)

西成・在日コリアン高齢者介護の現状、課題、方向性 岩山春夫

インクルーシブな地域社会をもとめてのアクションリサーチ～京都・西九条および小栗栖において外国人多住地域高齢者生活実態調査が進行中 石川久仁子

こるむ 2 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2011.1)

朝鮮学校の歴史 2 学校閉鎖令後の歩み 金東鶴

こるむ 3 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2011.1)

朝鮮学校の歴史 3 韓国との国交正常化の裏側で 1965年通達とその背景 金東鶴

狭山差別裁判 418 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2010.1) : 300円

野間宏とOさんの証言 2 庭山英雄

狭山差別裁判 419 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2010.2) : 300円

野間宏とOさんの証言 3 庭山英雄

人権と部落問題 810 (部落問題研究所刊, 2011.1) : 630円

特集 食の安全・安心

文芸の散歩道 『破戒』先行作品を読み直す 「旧主人」の結末部について 川端俊英

本棚 塚田孝著 『近世身分社会の捉え方 山川出版社高校に本紙教科書を通して』に学ぶ 森下徹

人権と部落問題 811 (部落問題研究所刊, 2011.2) : 630円

特集 日系ブラジル人労働者と移民問題

第48回部落問題研究者全国集会の報告

人権と部落問題 812 (部落問題研究所刊, 2011.2) : 1,155円

特集 同和対策を終結した自治体のその後

人権と部落問題 813 (部落問題研究所刊, 2011.3) : 630円

特集 変わる教科書

現地報告 京都市「総点検委員会」後の同和行政・同和教育の現状 藤谷剛

文芸の散歩道 「迷信」や「偏見」を乗り越える川端康成の流儀 桑原律

人権なら 1号 (NPOなら人権情報センター刊, 2011.1)

部落差別問題を次なるステージに なぜ、いま、解体・再構築なのか 山下力

人権なら 2号 (NPOなら人権情報センター刊, 2011.2)

大逆事件と幸徳秋水

季刊人権問題 362 (兵庫人権問題研究所刊, 2011.1) : 700円

特集2 部落問題の解決の道筋と運動

今、改めて「同和教育」を問う 人権劇と京都市教育委員会の方針に見る 新谷一男

振興会通信 96号 (同和教育振興会刊, 2011.1)

御同朋の教学 34 経と律の相応に見る、差別社会の克服 直海玄哲

信州農村開発史研究所報 114号 (信州農村開発史研究所刊, 2010.12)

信州農村開発史研究所創立30周年にあたって

佐久の歴史から学ぶ大切さ 五郎兵衛記念館と信州農村開発史研究所 川向秀武 / さらに羽ばたいていくことを 寺木伸明 / 資料・中村茂代議士の国会質問

月刊スティグマ 174 (千葉県人権啓発センター刊, 2010.12)

報告 千葉県人権啓発指導者養成講座

月刊スティグマ 176 (千葉県人権啓発センター刊, 2011.3) : 500円

特集 インターネットと差別書き込み

地域と人権 1096号 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.1.15) : 150円

立花町差別捏造事件を「捏造」するもの 5 週刊ポスト “連載「糾弾」” 批判 植山光朗

地域と人権 1097号 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.2.15) : 150円

立花町差別捏造事件を「捏造」するもの 6 週刊ポスト “連載「糾弾」” 批判 植山光朗

地域と人権 1098号 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.3.15) : 150円

子どもの「差別者」扱い根絶へ 変化踏まえ、さらに運動強化を(上) 西村導郎

国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 12 丹波正史

月刊地域と人権 323 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.1) : 350円

特集 第6回地域人権問題全国研究集会 第8分科会

行政の啓発事業は部落問題解決に有効か 滋賀県東近江

- できているのか』(村山斉著) / 『死刑の基準「永山裁判」が遺したもの』(堀川恵子)
 今週の1冊 『今、問われる日本の人種差別撤廃』(反差別国際運動日本委員会編)
 解放新聞 2509号(解放新聞社刊, 2011.3.7): 120円
 フィールドワークin唐津
 ぶらくを読む 58 芸能民信仰と芸能の神 宿神の誕生 下 湧水野亮輔
 解放新聞 2510号(解放新聞社刊, 2011.3.14): 80円
 第68回全国大会特集号
 解放新聞 2511号(解放新聞社刊, 2011.3.21): 80円
 部落解放同盟綱領
 解放新聞大阪版 1854号(解放新聞社大阪支局刊, 2010.12.27): 70円
 大阪の部落史を歩く 18 猿楽の誕生 茨木の夙が猿楽座の始まり のびしょうじ
 解放新聞大阪版 1855号(解放新聞社大阪支局刊, 2011.1.3・10): 70円
 雑誌「ホームレスと社会」を創刊して 水内俊雄
 解放新聞大阪版 1856号(解放新聞社大阪支局刊, 2011.1.17): 70円
 土地差別調査事件調査会糾弾要綱 部落解放同盟中央本部
 解放新聞大阪版 1858号(解放新聞社大阪支局刊, 2011.2.7): 70円
 大阪の部落史を歩く 19 解放令と府域の部落 上 部落をめぐる幕末の状況 のびしょうじ
 解放新聞大阪版 1860号(解放新聞社大阪支局刊, 2011.2.21): 70円
 部落解放同盟大阪府連合会第58回定期大会一般活動方針(第1次案)討議資料
 解放新聞改進黨 407号(部落解放同盟改進黨支部刊, 2011.1)
 転用にあたり一方的で強権的な京都市に強く抗議! 改進黨支部はコミセンの「公設・公営」運営を求める
 解放新聞改進黨 408号(部落解放同盟改進黨支部刊, 2011.1)
 旧改進黨学習施設の図書館の存続と充実を求める! コミセンの転用計画は図書室の廃止を前提としているのか?
 解放新聞東京版 755・756号(解放新聞社東京支局刊, 2011.1・15): 180円
 特集 私と狭山 1 中山武敏
 解放新聞奈良県版 928号(解放新聞社奈良支局刊, 2011.1.25): 50円
 主張 アイデンティティの側面からみた、部落解放運動の現状と未来 1
 解放新聞奈良県版 929号(解放新聞社奈良支局刊, 2011.2.10): 50円
 主張 アイデンティティの側面からみた、部落解放運動の現状と未来 2
 解放新聞奈良県版 930号(解放新聞社奈良支局刊, 2011.2.25): 50円
 主張 アイデンティティの側面からみた、部落解放運動の現状と未来 3
 解放新聞奈良県版 931号(解放新聞社奈良支局刊, 2011.3.10): 50円
 2011年度運動方針案特集号
 解放新聞兵庫版 757号(解放新聞社兵庫支局刊, 2011.2): 50円
 2011年度一般運動方針(第一次草案)
 解放新聞広島県版 2017号(解放新聞社広島支局刊, 2011.2.5)
 2011年部落解放運動の方向 上 小森龍邦
 解放新聞広島県版 2018号(解放新聞社広島支局刊, 2011.2.15)
 2011年部落解放運動の方向 下 小森龍邦
 解放新聞福岡県版 453号(解放新聞社福岡支局刊, 2010.12): 50円
 差別ハガキ偽造事件で初の糾弾学習会
 解放新聞福岡県版 455号(解放新聞社福岡支局刊, 2011.2): 50円
 第2回差別ハガキ偽造事件糾弾学習会
 語る・かたる・トーク 191(横浜国際人権センター刊, 2011.1): 500円
 わたしと部落とハンセン病 62 林力
 信州の近世部落の人びと 68 斎藤洋一
 同和問題再考 121 行商 田村正男
 部落差別の現実 102 人権運動のリーダー 3 江嶋修作
 語る・かたる・トーク 192(横浜国際人権センター刊, 2011.2): 500円
 わたしと部落とハンセン病 63 林力
 信州の近世部落の人びと 69 皮の売買をめぐる部落の頭と配下の人びとの争い 上 斎藤洋一
 同和問題再考 122 食肉 田村正男
 部落差別の現実 103 人権とは 1 江嶋修作
 語る・かたる・トーク 193(横浜国際人権センター刊, 2011.3): 500円
 わたしと部落とハンセン病 64 林力
 信州の近世部落の人びと 70 皮の売買をめぐる部落の頭と配下の人びとの争い 下 斎藤洋一
 同和問題再考 123 食肉 田村正男
 部落差別の現実 104 人権とは 2 江嶋修作
 かわとはきもの 154(東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2010.12)
 靴の歴史散歩 99 稲川實
 皮革関連統計資料
 教化研究 149(真宗大谷派宗務所刊, 2010.12): 1,200円
 ハンセン病隔離政策と大谷派教団 「慰安教化」活動を中心として 訓覇浩
 性差別から問われる教団 男女両性で形づくる教団にむけて・女性室設置の願いと課題 山内小夜子
 キリスト教社会問題研究 59(同志社大学人文科学研究センター刊, 2010.12): 1,000円
 留岡幸助と家庭学校機関誌『人道』 近代日本の社会事業雑誌 室田保夫
 グローブ 64(世界人権問題研究センター刊, 2011.1)
 王家(天皇家)と今良 宇那木隆司

収集逐次刊行物目次 (2011年1月～3月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

- 朝田教育財団だより 14 (朝田教育財団刊, 2011.1)
差別と向き合う 森本弘義
明日を拓く 85 (東日本部落解放研究所刊, 2010.3) : 1,050円
特集 多文化・多言語化する日本社会と子どもたち
明日を拓く 86 解放研究 24号 (東日本部落解放研究所刊, 2010.9) : 2,100円
「武州鼻緒騒動」関係史料集成 中編 間々田和夫/大熊哲雄/畑中敏之/廣畑研二
史料紹介 『奥南革師方諸留』と「癩人小屋」についての状断片 (仮称) 鯨井千佐登
前理事長・内田雄造氏の逝去を悼む 「遺稿」の掲載にあたって
同和地区のコミュニティデベロップメントの新しい展開 同和对策事業に関わる一連の特別措置法失効後の動向 内田雄造
跡地発 43 (市民交流センターすみよし南刊, 2011.1)
十人十色の人権問題 34 届いていますか?子どもと親の叫び 石田雅弘
ウィングスきょうと 102 (京都市女性協会刊, 2011.2)
図書情報室新刊案内
『パートナーに左右されない一生のマナー計画』(大竹のり子著)/『女、一生の働き方～貧乏ばあさん(BB)から働くハッピーばあさん(HB)へ～』(樋口恵子著)
解放運動推進フォーラム 42 (真宗大谷派解放運動推進本部刊, 2011.2)
「真宗大谷派同和関係寺院協議会」現地研修会報告
「『大谷派糾弾会とは!』～何を問い、何を願うのか～講師 小森龍邦氏」
解放教育 518 (解放教育研究所編, 2011.1) : 770円
特集 L G B T 多様なセクシュアリティ
巻末資料 「教職員のためのセクシュアル・マイノリティサポートブック」より
解放教育 519 (解放教育研究所編, 2011.2) : 770円
特集 在日コリアンの現状と教育
解放教育 520 (解放教育研究所編, 2011.3) : 770円
特集 アイヌ民族の未来と教育
解放教育 521 (解放教育研究所編, 2011.4) : 770円
特集 小一プロブレムの予防と保幼小連携
解放新聞 2501号 (解放新聞社刊, 2011.1.3) : 160円
対談 金子マーティン・組坂繁之
世良田村事件 文・朝治武
対談 中山武敏・鯨越溢弘
ムラじまん支部じまん
徳島市芝原の「ひっかり雑炊」, 中野市新野の「おやき」
新春に、この3冊
『イギリス近代史講義』(川北稔著)/『日本の解放区を旅する』(鎌田慧著)/『曹洞宗の戦争』(一戸彰晃著)
解放新聞 2502号 (解放新聞社刊, 2011.1.17) : 80円
対談 金子マーティン・組坂繁之
対談 中山武敏・鯨越溢弘
解放新聞 2503号 (解放新聞社刊, 2011.1.24) : 80円
解放の文学 57 「国家犯罪」にあえぐ群像 田中伸尚と『大逆事件』 音谷健郎
解放新聞 2504号 (解放新聞社刊, 2011.1.31) : 120円
2011年度一般運動方針(第1次草案)
解放新聞 2505号 (解放新聞社刊, 2011.2.7) : 80円
山口公博が読む今月の本
『読む全日本プロレス』(和田京平著)/『甘粕正彦乱心の曠野』(佐野真一著)/『中学生の満州敗戦日記』(今井和也著)
解放新聞 2507号 (解放新聞社刊, 2011.2.21) : 80円
解放の文学 58 仮想空間での人間造形 眉村卓『司政官』 音谷健郎
解放新聞 2508号 (解放新聞社刊, 2011.2.28) : 80円
山口公博が読む今月の本
『暗い絵 顔の中の赤い月』(野間宏著)/『宇宙は何

事務局よりお知らせ

今年度の部落史連続講座が決まりました。11頁でお知らせしていますように、今回は田中部落に関する歴史についての講座を地元のセンターで開催します。どうぞふるってご参加ください。

当資料センターの入居している京都府部落解放センターは現在改修工事中ですが、当センターの営業は平常通りですのでご利用下さい。尚、休室日につきましてはホームページでご確認ください。

昨年度の部落史連続講座講演録が出来上がりました。ご希望の方は下記までご連絡ください。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分